

10月23日 ヨブ記 38章 1～18節 今日の説教から

説教題：「知りつくせない創造の業」

今日の聖書箇所であるヨブ記は、聖書の中でも異彩を放つ書物であります。ヨブ記の一般的なイメージとしては、「神様がサタンから賭けを持ち掛けられて、ヨブの信仰を試すことになる。苦しめられたヨブが神様への信仰を捨てるのかどうかが試されて、友人との問答を繰り返す。ヨブは神様への信仰を失わず、最後にはヨブが神様に報われて幸せな結末が与えられる」という感じではないでしょうか。ただ、実際に読み進めてみますと、思っていたよりもヨブは神様に対して恨み言を言っていますし、「自分なんて死んでしまえばよかったんだ」「生まれてこなければよかったんだ」と、大きな嘆きの中に沈んでいます。そして、ヨブは「自分は正しい」という姿勢を崩さず、神様と正面からぶつかる姿勢すら持っているのです。

そのヨブ記の中で、今日の38章は最後の場面であり、沈黙を保っていた神様がヨブに対して語り始める場面から始まっています。神様は天地創造の業をヨブに語り掛け、「お前は私が持つ知識もないのに、私の計画に異議を立てることができるような人間なのか、いやそうではないだろう」とヨブの姿勢を正そうとしています。どのような創造の業もヨブには動かすことは出来ない、そのような人間の力の限界がヨブに突き付けられました。

今日の個所で示されている天地創造の業、そのすべてを私たちはまだ理解しきることが出来ていません。科学の力が高まり行くこの時代で、私たちは時に、そのすべてを知ることが出来るという思い上がりへと至ってしまうことがあります。それはやがて、科学技術や人間を神とするような、偶像崇拜へと陥ってしまうこととなります。

神様が造り出したこの世界を軽視するような、環境の破壊も歴史的に行われてきました。石炭や石油から始まった産業革命における環境問題から、企業による公害の問題、最近であれば原子力発電所の事故による環境汚染など、様々な問題が人間の手によって起こされてきました。私たちは創世記に記されている天地創造の時に人間に与えられた、この世界を管理・維持する責任がありながら、多くの過ちを犯しているのです。

ただ、よく考えてみると、「これらの技術が実現可能なように世界を創った」のも神様である、ということは忘れてはいけません。科学技術力の高まりは、私たち人間に全能の力を期待させます。遺伝子の組み換えや新しいエネルギー、宇宙開発やVR技術による「新しい世界への開発」が行われるこの時代ではありますが、ただその技術もまた「神様の手のひらの中」「神様のご計画の中」に過ぎないものなのです。すべての技術をどう使うのか、それが問われているのです。

ヨブに対してそうであったように、神様はすべてが終わるその時まで私たちのことをよく見ています。私たちが正しく生きることが出来るかどうか、信仰を持ち続けることが出来るかどうか、イエス様の言葉を忘れないかどうか、そのすべてが神様に見られていることを意識しながら私たちは日々を歩む必要があるのです。

神様が私たちと共に歩んでくれている、神様が私たちのことを常に見ている、その緊張感に支えられながら、今週一週間の、これからの歩みを共に進めていきましょう。

今日の説教箇所：ヨブ記 38 章 1～18 節

- 1:主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて／神の経綸を暗くするとは。男らしく、腰に帯をせよ。わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。わたしが大地を据えたとき お前はどこにいたのか。知っていたというなら 理解していることを言ってみよ。誰がその広がりを選んだかを知っているのか。誰がその上に測り縄を張ったのか。基の柱はどこに沈められたのか。誰が隅の親石を置いたのか。そのとき、夜明けの星はこぞって喜び歌い 神の子らは皆、喜びの声をあげた。海は二つの扉を押し開いてほとぼしり 母の胎から溢れ出た。わたしは密雲をその着物とし 濃霧をその産着としてまとわせた。しかし、わたしはそれに限界を定め 二つの扉にかんぬきを付け「ここまでは来てもよいが越えてはならない。高ぶる波をここでとどめよ」と命じた。
- 12:お前は一生に一度でも朝に命令し 曙に役割を指示したことがあるか 大地の縁をつかんで 神に逆らう者どもを地上から払い落とせと。大地は粘土に型を押していくように姿を変え すべては装われて現れる。しかし、悪者どもにはその光も拒まれ 振り上げた腕は折られる。お前は海の湧き出るところまで行き着き 深淵の底を行き巡ったことがあるか。死の門がお前に姿を見せ 死の闇の門を見たことがあるか。お前はまた、大地の広がりをも隅々まで調べたことがあるか。そのすべてを知っているなら言ってみよ。